七つの〈赤い船〉

― 未明童話を鳥瞰する素材として ―

柏原陽子

はじめに

小川未明の童話の傾向をつかもうとする試みは、これまで、船木枳郎氏[1]、鳥越信氏[2]らによってなされてきた。それらは、作風の変化を、作家の経験に対応させながら特徴づけることでいずれも成功している。しかし、船木氏の著書の「目次」を見てもわかるように、未明童話を多角的な視点によって分類することはできても、それらを統括する視点を得ることはできていないようである。[3] このような中において、未明童話全体の大きな一つの見通しとなるものを得たいというのが本稿の目ざすところである。

ところで、未明童話には、類似の素材を用いた作品が多い。これら類似の素材に注目し、そこから何らかの特徴を引き出そうとした試みもいくつか見られる。[4] しかし、それらも、通時的な視点を持つまでには至っていない。私は、未明童話に繰り返し見られる類似の素材に注目することで、作品の変化の様相を一望し、作家の思考の方向性を探ることはできないであろうかと考えていた。

そのような中、注目するにいたったのが、〈船〉という素材、とりわけ〈赤い船〉という素材である。というのは、未明の処女童話集が『赤い船』というタイトルを持つこと、その表題作「赤い船」は、「『憧憬』が描かれ、『情緒的』であることがそれまでの児童文学と異なる[5]」、「新時代の先駆[6]」として、昭和に入って以来、高く評価されていることのためであり、さらには、この〈赤い船〉は、「赤い船」（M43・7『少女』）、「黒い旗物語」（T4・4『日本少年』）、「黒い塔」（T8・12『金の輪』　南北社）、「赤い船のお客」（T13・5『童話』）、「海からきた使い」（T14・1『少女倶楽部』）、「赤い船とつばめ」（S2・9『未明童話集』2　丸善株式会社）、「幼友だち」（S9・9『せうがく三年生』～S10・7『小学四年生』）という、明治末から、大正、昭和初期にわたって発表された七作品に見られるからである。[7]

もとより、千余編とも言われる未明童話の中の七作品というと、いかにも僅少ではある。しかし、〈赤い船〉の内包するもの、さらには未明童話全体にわたる分布の状況は、明らかに何らかの意味を示唆しているようである。そこで、本稿では、未明童話における〈赤い船〉に着目し、その内実と、それらが未明童話全体においてどのような意義を持っているのかについて考察したい。

先に概観を述べておくと、七作品は〈赤い船〉の内包する意味や、未明童話全体における位置の変化などから、三つに分けることができそうである。すなわち、大正十年頃までの「赤い船」「黒い旗物語」「黒い塔」、大正末から昭和初期の「赤い船のお客」「海から来た使い」「赤い船とつばめ」、昭和十年頃の「幼友だち」である。これをⅠ、Ⅱ、Ⅲと区分し、次に個々の内部の検討に入りたい。

一　弱者によりそう〈赤い船〉

以下、この七作品に見られる〈赤い船〉を、その順次に従って、仮に第一～第七と番号をつけてみる。[8]

第一の〈赤い船〉

作品「赤い船」は、主人公露子の憧れが、「村」から「東京」へ、「海」から「外国」へと広がっていくさまが描かれている。この作品での〈赤い船〉は、「外国」へ向かう船であり、次に見るように、露子の憧れと空想とを担うものである。

そう思うと、なんとなくあの赤い船が懐かしいのであります。あの赤い船は太平洋を渡って、美しい国へいくのかと思いますと、あの赤い船にどんな人が乗っていて、なにをしているかと考えました。（中略）

露子は、どうしてもその赤い船の姿を忘れることができません。自分も、その船に乗って外国へいってみたい。そして、オルガンやピアノや、いい音楽を聞いたり、習ったりしたいものだと考えました。

この作品における、「貧しい家に生まれ」た主人公露子について、畠山兆子氏に次のような指摘がある。[9]

とめどなく広がっていく露子の憧れには、陰りのない明るさをみることができない。憧れは現実が厳しければ厳しいほど、逃避としての激しさを増すといわれている。露子の世界が憧れでうめられているということは、子どもをとりまく現実が、逆に厳しいものであったことを意味している。露子は現実が不幸であるがゆえに、外国へ行って音楽を習いたいという、実現することのない夢を追って生きているのである。

しかし、東京の家には「ちょうど露子の姉さんに当たるくらいのお方がありまして、よく露子をあわれみ、かわいがられました」とあることを考えると、ただに、露子の「不幸」な「現実」が、憧れで隠されているとは言い難い。また、「露子は、自分の母さまや、父さまのことを思い出し、また村の小学校のことなどを思い出して、いつしか熱い涙が、ほおを流れた」という郷愁も、「ピアノをお弾きなさるお姉さまが、すきとおるお声で、外国の歌をうたいなさるお姿は、いつもよりかいっそう神々しく見えたのであります。水晶のようなお目は星のごとく輝いて、涙が浮かんでいたのでありました。」というお姉さまの様子に触発された感傷であろうことをふまえると、畠山氏の指摘は、やや深読みの危険をはらむ。[10]この作品は、大きくは、〈赤い船〉に象徴される憧れ、あるいは夢の世界を描き出していると言えよう。

ただ、「黒い旗物語」「黒い塔」とのかかわりで見るとき、この作品に一抹の「陰り」があることも否定できない。「黒い旗物語」「黒

い塔」では、貧しいもの、不幸なものが主人公として描かれているが、〈赤い船〉はそれら弱者によりそうという傾向を見せている。〈赤い船〉のもとで、「貧しさ」の問題がクローズアップされて行くのを見るとき、「貧しい家に生まれた」露子の空想世界を担う〈赤い船〉は、この作品の「陰り」を包み隠しているとも思われるのである。

それでは次に、「黒い旗物語」を見てみよう。[11]

第二の〈赤い船〉

「赤い船」では、「貧しい」という現実は、憧れに覆われていた。しかし、「黒い旗物語」では、主人公を乞食の子供と設定することによって、そのことが全面に押し出されている。人情を求めて北の港町にやってきた爺と子供の二人の乞食は、人々の迫害にあって晩秋の海に姿を消す。ある晩、海の響きが恐ろしく鳴ったかと思うと、朝、港の近くに「地平線から抜け上がったように真っ赤な船」が「黒い旗」を二本のマストに翻しながら浮かんでいた。すると、町には再び乞食の子供の姿が見られるようになる。子供は、船にいるお爺さんのために、船からもらった宝で着る物や食べる物を買いたいと、町の人々に頼む。しかし、人々は、以前と同様に子供を追い返してしまう。その夜、町は火事で滅んでしまった。

この作品は、単純な構造、平板な人物造形にもかかわらず、独特の暗い、不気味な雰囲気を持っている。この雰囲気の一翼を担っているのが〈赤い船〉である。この〈赤い船〉を、町の人々は「あのいやな色をした船は、どこからきたのだろう。」、「あれはあたりまえの船と違うようだ。きっと幽霊船であるかもしれない。」、「幽霊船というものは見るものでない」と言う。

ところが、乞食の子供は、「さんごや真珠や金の塊」を「船からもらってきた」、「お爺さんは船に待っています」と言う。〈赤い船〉は、町の人々にとっては忌避するものであるが、主人公にとっては救いなのである。

また、この〈赤い船〉は、結末において、「この町から火事が出て」「一軒も残らず焼きはらわれてしまいました。いまでも北海の地平線にはおりおり黒い旗が見えます。」とあるように、非情な町の人々に対する報復をなしたものであるかのように描かれている。この作品の中にあって、〈赤い船〉は弱者によりそい、強者に制裁を加えるという、一つの意思を持つものとして存在するのである。

「赤い船」の〈赤い船〉は、外国に向かう実在の船であったが、海を見つめる主人公露子から「だんだん遠ざかって」行き、現実を覆い隠す空想の中で、露子の憧れを支えるものとなっていった。しかし、「黒い旗物語」の〈赤い船〉は、実在の危ぶまれる「幽霊船」、「不思議」な船であり、弱者を擁護する、ある意思を持つものとなっている。

ところで、町の滅びという結末は、同じく大正期に発表された名作「赤いろうそくと人魚」（T10・2/16～2/20『東京朝日新聞』）にも見られる。「真っ暗な、星も見えない、雨の降る晩に、波の上から、赤いろうそくの灯が、漂って、だんだん高く登って、いつしか山の上のお宮をさして、ちらちらと動いてゆくのを見たものがあります。／幾年もたたずして、そのふもとの町はほろびて、滅くなってしまいました。」という「赤いろうそくと人魚」の結末からは、〈赤いろうそく〉が、「黒い旗物語」の〈赤い船〉と同じ役割をはたしていること

がうかがえる。作品構造、人物造形の複雑さから、「赤いろうそくと人魚」は「黒い旗物語」の発展したものと捉えることができるが[11]、これはまた、この時期、作品を創作する上で、ある素材に願いと呪いを託すという方法を、未明がとっていたということでもあろう。となれば、〈赤い船〉は、未明の中で大きな位置を占めていた素材ではなかったかと、ここからも考えることができよう。

さて、次の「黒い塔」でも、人間の非情さに対する怒りと、街の滅びが描かれる。しかし、「黒い塔」では〈赤い船〉の果たす役割は変化している。次に、そのことを見てみたい。

第三の〈赤い船〉

「黒い塔」は、病気や事故という不運を通して、肉親からも街の人人からも疎まれる主人公の姉の姫の物語である。ある日、姉の姫は、自分を手招きするように見える塔から海を眺めて心を慰めようと、人人が「幽霊塔」と言う「白い塔」[12]に登る。すると、ふいに襲ってきたつなみによって、街は滅んでしまう。しかし、一人、塔の上に残された姉の姫は、〈赤い船〉によって救い出され、どこへともなく去っていく。そして、夜が明けると、塔も水没し一面が海になった。

この作品は、「その船は絵にも見たことのない、また話にも聞いたことのないような、きれいな」船と、美しさが強調される点で、「赤い船」と通じている。また、非人情な人々と、彼等に迫害される主人公、〈赤い船〉による主人公の救いと、町／街の滅びという設定は、「黒い旗物語」とよく似ている。「黒い塔」の〈赤い船〉は、先の二作品の〈赤い船〉が、統合されたものと言えよう。

ところが「黒い塔」は、いくつかの点で「黒い旗物語」と異なっている。一つには、街への制裁が、「お母さまや妹のいるお城を見ながら案じて、どうかしてお母さまや妹の身の上に危害のないように」という姉の姫の祈りを無視したものであり、「姫はとても命が助からないと思って、心細さにふるえて」、「塔の頂に泣いて」いたということが描かれている点である。

二つには、〈赤い船〉に、呪いというイメージは与えられていない点である。「黒い旗物語」で見た、呪われたものという役割は、「黒い塔」では、作中の「白い塔」に移っており、姉の姫には「不思議な高い塔」が「手招ぎする」ように見えたように、弱者へよりそう意思もそこに見られる。「黒い塔」では、呪いが「白い塔」に、救いが〈赤い船〉に、それぞれ別々に担わされていると言えよう。

三つには、「小鳥は、いまもなお姫のゆくえをたずねて、夏になると北へ、冬になると南へ、旅をして、あわれな姫を探しています。」という結末である。姉の姫は死を免れた。しかし、〈赤い船〉は決して姉の姫を「あわれ」な状態から救い得ていない、との提示がここにある。

非情な人々への制裁は、姉の姫の悲しみをさらに増す結果となる。また、〈赤い船〉は「あわれ」な姉の姫を乗せてさまよう。ここに、超自然的な力による滅びや救いは、なんら、人間の非情さが生みだす不幸を解決し得ない、また、個人の運命を変え得ないという、「黒い旗物語」には無かった問題意識を見い出すことができよう。以上のような違いが「黒い旗物語」と「黒い塔」の間には見られる。このことは、不幸の原因を追究していく中で生じた、一つの「ゆらぎ」とでも言えようか。

以後、この「ゆらぎ」は、どのように展開していくのか。次に、Ⅱを見てみよう。

Ⅱ　〈赤い船〉からの離反

Ⅰ群における〈赤い船〉は、弱者の救い、強者の滅びの象徴であった。しかし、そこにはある「ゆらぎ」も見い出すことができた。Ⅱ群における〈赤い船〉は、美しいという要素を引き継ぎながらも、それぞれの作品の主題がⅠ群の作品を反復そして変容する形で展開する。すなわち、「赤い船」の世界が「赤い船とお客」に引き継がれ変容し、「黒い旗物語」「黒い塔」の世界が「海から来た使い」で統括され、「赤い船とつばめ」で新しい滅びの意味が示されるのである。以下、作品を見ていこう。

第四の〈赤い船〉

「赤い船のお客」は、笛を吹くことで夢心地になる中で目にする〈赤い船〉を通して、主人公二郎が、現実を認識していく過程が描かれた作品である。その様子は、次のように描かれている。

・このとき、二郎は、ふと沖の方を見ますと、そこにはわき出たように、赤い船が青い海の波間に浮かんでいたのであります。
二郎は、お伽噺にでもあるように、美しい船だと思いました。
（中略）しばらくすると、赤い船の姿はうすれ、洋服を着た人の姿もうすれてしまいました。
二郎は、まるで夢を見ているような心地がされたのでした。
・そして、沖の方をながめますと、赤い船がいっそうはっきりとして、青い青い、波の間に浮き出ているのでした。（中略）
二郎は目を開けながら、自分は、夢を見ているのではないかと思ったのでした。
・それは昨日の晩方、港の方へ歩いてゆくと、町の中で背のすらりっとした、ほおの色の美しい、りっぱな着物を着た旅の女の人を見たのでした。（中略）
二郎は沖の方を見ますと、赤い船が、今日も停まっていました。
やはり、夢ではなかったことがわかりました。

この作品は、作品全体を主人公の空想が覆い、〈赤い船〉がその世界にかかわっている。これは、作品「赤い船」との共通点である。しかし、この空想をめぐって、次の点で大きく「赤い船」との違いを見せている。

先に見た「赤い船」の結末は、〈赤い船〉を中心にした、遠くへと広がって行く露子の憧れと空想とで閉じられていた。それに対し、この「赤い船のお客」の結末では、「ある果物屋の前で、ふたたび昨日の美しい女の人に出あいました。／彼は思わず顔を赤らめて、その人を見送りますと、／『このごろ、港にはいってきた、赤い船のお客さまだよ。』と、町の女房たちが、うわさしているのをきいたのであります。」とあるように、二郎の視点は「沖の方」から「町」へ、空想から現実へと移っている。さらに憧憬の対象も、〈赤い船〉から「お客」の女性へと移っている。ここには、〈赤い船〉と主人公との関係が、薄らいできている様子がうかがえる。

また、この作品に見る明るい雰囲気、現実への志向性、〈赤い船〉と主人公との距離、怒りや呪いといった要素の不在は、Ⅰ群で見た作

品世界との断絶を感じさせもする。このことは、次に続く作品によって、さらに積極的にあらわれてくるのである。

第五の〈赤い船〉

「海からきた使い」は、天使の子供が、貧しい少女の姿になって下界にやってくる話である。ここで、〈赤い船〉は天使が乗るものとして、作品冒頭に次のように説明されている。

天国から、下界に達する道はいくつかありました。赤い船に乗って、雲の間や、波の間を分けてから、怖ろしい旋風に、体をまかせて二日二晩も長い旅をつづけてから、ようやく、下界の海の上に静かに、降りることも、その一つであれば、（後略）

また、下界に降りてきた少女を、再び〈赤い船〉が迎えに来るところでは、「町の人々は、不思議な景色が見えなくなると、家の方に帰りましたが、少女だけは、岩の上に立って、沖の方をいっしんに望んでいました。そのうちに、一そうの赤い船が、こちらをさしてこいできたのです。少女を迎えにきたのでした。」とある。このように、この作品の〈赤い船〉は、天使の乗り物としてあり、人間とは関係を持たない。

さて、主人公の少女は、天使であり、人間を超越した力を持っている。それは、少女の祈りで、情け深い娘の母親の病気が快方に向かったことからもわかる。しかし、少女の力は、「祈り」として消極的にしか発揮されない。より目立つのは、人間の諸相に対する同情や腹立ちであり、その現実の中で親切にふるまう在り方である。ここには、超自然の力を積極的に行使しての、貧しい者の救いも、非情な者への制裁もない。これは先に見た、「黒い旗物語」「黒い塔」との大きな違いである。

また、この作品で、〈赤い船〉は、天使の乗り物という超現実的なものであるが、人間存在になんら影響を及ぼさない。このように、〈赤い船〉が弱者によりそうものではなくなったことに関しては、目の見えない按摩に、その理由の一つを求めることができる。按摩は、体が不自由であり、そのため道に落とした銭を拾うことができなかった。通りすがりの人々は、誰も按摩を助けようとせず、中には、按摩の落とした銭を後で来て拾おうと考える者もいる。それを見て少女は、「なんという、人間は、あさましい心を持っているのでしょう」、「薄情」だと驚嘆し、すぐに按摩を助ける。ここでは、通行人の非情さを悪なるものとして、相対的に弱者である按摩は善なるものと位置づけられている。

しかし一方では、少女をめぐって、按摩は次に挙げたような打算的な面も見せる。

盲目のおじいさんは、おばあさんのそでをひきました。

「やさしい子でもあるし、両親がないというのだから、幸い、家の子にしてはどうだな？」（中略）

「そう、おまえさんのように、やすやすときめていいものですか……。」と、怒り声を出していいました。

「おばあさん、よく考えてみるがいい。こんな子供があったら、どれほど、家の役にたつかしれないぜ。」と、按摩はいいました。おばあさんは、なるほどとうなずきました。そこで、急に、声をやさしくして、少女に向かって、

「どこのお嬢さんですか、知りませんが、いまのお話のような身

の上でしたら、私の家の子になってくださいませんか。（後略）」

このような、按摩の老人夫婦に対する批判は、この作品に描かれてはいない。しかし、「老人夫婦は、けっして、心の悪い人ではありませんでしたから、少女は、つらいことがあってもがまんをいたしました。」という箇所に、弱者をそのまま善なるものとして位置づけることに対する違和感を見い出すことができる。[13]

ここには、弱者の内にも「あさましい心」があり、弱者と強者、非情な者とそうでない者との二つに簡単に割り切ることができないという人間理解が見られる。こういった人間理解は、怒りを差し向ける対象の喪失を招き、救うべき対象をも不明にし、ついに、作品世界において滅びと救いが一面的には機能しなくなるという結果となっていった。

しかし、こういった人間の複相を認めながらも、決して人間に対してあきらめてはいない。それは、結末における「小さなやさしい天使は、下界で見たことと知ったことを語りました。そして、正直な、哀れな人たちに、幸福を与えてやりたいと答えたのであります。」に見ることができる。ここには、非人情を悪としそれを追究し罰するという発想から、善なるものの希望と行動的な生き方によって幸福を生みだそうという発想への、転換の表明がなされているのである。

第六の〈赤い船〉

「赤い船とつばめ」は、「南の国から」「つばめを迎えに、王さまが、よこされた」〈赤い船〉に乗り遅れた主人公のつばめが、暴風の中、自分の翼で海を越え、無事に目的地に着くことのできたという作品である。この中で〈赤い船〉は、「はるか目の下の波間に、赤い船が、暴風のために、くつがえっているのを見ました。それは、王さまのお迎えに出された赤い船です。」という末路をたどる。そして、結末では、「王さまは、ここにはじめて、自らの力をたよることのいちばん安心なのを悟られ、あくる年から、赤い船を出すことを見合わせられたのであります。」という、個人の生への注視と、〈赤い船〉からの離反が示される。

「自分の力をたよること」が「いちばん安心」という新しい生き方の表明は、この作品単独で見れば、ポジティヴなものである。しかし、これまでの作品を通して見るときには、どうであろうか。「赤い船とつばめ」における〈赤い船〉の転覆は、同情、怒り、願いというさまざまな思いを〈赤い船〉に託すことで、社会に対する理想の実現を訴えてきたそれまでの主題と、また、天的な美に彩られた〈赤い船〉のロマンチックな空想世界とを否定するという、ネガティヴなダイナミズムをはらんでいるのではないだろうか。

かくして、Ⅰ群において見られた社会批判の中での「ゆらぎ」は、Ⅱ群において〈赤い船〉から離反して行くにともない、個人の生の注視へと変容を遂げていく。[14] そして、一見したところポジティヴな〈赤い船〉転覆の主題は、作者未明のある悲痛な思いを秘めたものであることが、最後の〈赤い船〉によって知られるのである。

Ⅲ　再び現われる〈赤い船〉

第七の〈赤い船〉

〈赤い船〉の転覆以後、〈赤い船〉はしばらく作品の中に出てこない。再び見られるのは、未明童話の中では珍しく中編ないし長編と言える「幼友だち」（S9・9『せうがく三年生』～S10・7『小学四年生』）の中である。これは、少年幸一と少女ゆき子の北国での交友と、幸一の東京での生活、ゆき子との再会が描かれた作品である。

この作品の中で〈赤い船〉は、ゆき子の友達が持っている本の中に次のように描かれている。

「ねえ、ゆき子さん、このお話はそれはおもしろいのよ。」と、いって、二人は、桜の木の下の、ベンチに腰をかけました。坊やは外がいいとみえて、よく背中で眠っています。「このお父さんは、赤い船に乗って、世界じゅうの港々を歩いているのよ。自分の娘が、小さい時分、何者かにつれられていってしまったの。そして、名高い易者に見てもらうと、どこかの港に、娘は生きているというの。けれど、どこの国ということも、その港の名もわからないの。そして、娘さんは、毎日、毎日、海の方をながめて、お父さんか、お母さんが迎えにきてくれるのを待っているといったのよ。これをきくとお父さんは、娘を探しあてるまでは、もうけっしてお家に帰らないといって、こうして、赤い船に乗って、娘のいる港をさがしているのが書いてあるの。読むと、怖ろしいことや、不思議なことがあるのよ。こんど、ゆき子さんに貸してあげるから読んでごらんなさいね。」

ゆき子は、「この話をきいただけで」、「『卒業したら、ゆき子を東京へ出しなさい。』と、このあいだ、伯父さんから、いってきたことなどが思い出され」て「悲しく」なる。しかし、すぐに話題は「なんだか、へんな空ね。」と天候のことに移っていく。以後、ゆき子は、故郷を立つ日を前にして涙ぐみはするものの、東京へ着いてみれば、伯父の家族に温かく迎えられ、看護婦になるための勉強もできる望みができる。つまり、〈赤い船〉の出てくる本は、当該箇所でのみ郷愁の涙をさそうものとして機能しているのである。

ところが、ここでの〈赤い船〉とほぼ同じものが、「幼友だち」より前に発表された作品、「雪原の少年」（S6・4・18～6・6『国民新聞』）に〈銀色の船〉として見られる。〈銀色の船〉は、主人公の少年、正二の創った詩に出てくる。

彼は、この間にも、吹雪と戦いながら、雑誌に投書する、詩の文句を、頭の中で考えていました。

すきとおる紫色に、ぶどうの実が熟し、
赤とんぼの小さな翼が輝くころ私の乗る銀色の船が、
青い空と波の間を分けて、かわいそうな
私を迎えにくる。

正二も、また、「幼友だち」中の〈赤い船〉の出てくる本の登場人物と同様に、生き別れの肉親がいると行者に占われ、彼はその言葉を信じて、母の迎えを待っている。そのような正二が詩に描いているのは、美しい憧れと願いの世界であり、その中において〈銀色の船〉は、彼の救いとされている。

さらには、「雪原の少年」と「幼友だち」の間に発表されている「希望」（S8・5『現代』）にも、〈銀色の船〉が見られる。そこでは、主人公の青年の希望、憧れとしての〈銀色の船〉が次のように語られている。

夏の晩方のことでした。一人の青年が、がけの上に腰を下ろして、海をながめていました。（中略）

「昨夜も同じ夢を見た。はじめは白鳥が、小さな翼を金色にかがやかして、空を飛んでくるように思えた。それが私を迎えにきた船だったのだ。」

青年は、だれか知らぬが、海のかなたから自分を迎えにくるものがあるような気がしました。そして、それが、もう長い間の信仰でありました。この不自由な、醜い、矛盾と焦燥と欠乏と腹立たしさの、現実の生活から、解放される日は、そのときであるような気がしたのです。

この〈銀色の船〉は、「常夏の花のような赤い旗」をひらめかせながら、青年の前に現われる。そして青年は、「とうとう、幻が現実となった」、「そして幸福が、刻々に、自分に向かって近づいてくる」と感じるのである。このような、救いとしての〈船〉のありようは、Ⅰ群で見てきた〈赤い船〉と同様である。

しかし、ここでの〈銀色の船〉は、青年を招かず、「黒い箱」を置いて行くだけである。青年は、船の姿がまったく見えなくなってから、「黒い箱」に近づき、開けようとする。すると、「このとき、思いがけなく」現われた、「白いひげをのばした老人」に呼び止められ、「幸福と正反対の死」が青年の頭にひらめく。青年は「おれは、まだ死んではならない」と言って箱を開けずに海辺を去った。後に青年は、この話を人にするが、「『君は、夢を見たのだ。』とだれも信じてくれ」ない。そして、「そのうちに、彼の青春も去ってしまったのであります。」と作品は閉じられる。

ここには、これまで見てきた〈赤い船〉の要素が、統合された形で描かれている。すなわち、この作品には具体的に描かれていない、「不自由な、醜い、矛盾と焦燥と欠乏と腹立たしさの、現実の生活」は、Ⅰ群で見てきた滅びの世界を指すとも言えようし、船による「現実の生活」からの「解放」は、〈赤い船〉の救いにも等しい。また、「黒い箱」を開けずに、一見したところポジティヴな「現実の世界」を生きる（「死んではならない」）という決意は、Ⅱ群の〈赤い船〉からの離反と似ており興味深い。

となれば、青年の信仰と希望と経験とが、誰にも理解されないまま、「青春も去ってしまった」とするの結末の感慨は、〈赤い船〉離反以後の、作者の心中告白ではないだろうか。そして、作者の体験的要素の豊富な「雪原の少年」の中で、[15] あるいは「幼友だち」の中で、再び〈赤い船〉を描かざるを得なかったところに、やはり捨てるのできない、作者未明の〈赤い船〉に託した幸福実現への強い願いと憧れとを見ることができるのである。

以上のように、〈赤い船〉とよく似た内実を持つ「雪原の少年」「希望」の〈銀色の船〉を経て、「幼友だち」で、〈赤い船〉が再び残像として現われているのである。「幼友だち」の〈赤い船〉は、娘探しの冒険談、ファンタジーの世界に存在している。あるいは、この〈赤い船〉の世界を描いていけたならば、未明童話には新たな地平が展開したのかもしれない。しかし、「虚構の世界でユートピアをつくり出そうとするには、未明はあまりにも正直すぎた」[16] ために、「幼友だち」を最後に、〈赤い船〉は、未明童話の中に姿を見せることはなくなるのである。

おわりに

七つの作品において、〈赤い船〉は、微妙にニュアンスの違いを見せて変わっていった。このことは、未明童話のバリエーションを示していよう。また、「赤い船」から始まった〈赤い船〉のさまよいは、「救い」「滅び」という問題をめぐって、変化していった。この変化は、とかく感情的、直感的といわれ、論理性に乏しい作家であるとされている小川未明が、理想を追求していく中で、社会変革の願いから個人の生の在り方重視へと移行していく様を表わしているようである。それは〈赤い船〉との訣別という形で描かれていった。しかし、その後〈銀色の船〉として憧れの世界が描かれ、再び〈赤い船〉が作中に登場するのを見るとき、そこには、浪漫的な救いというものへの憧れを抱き続けている作者の心象がうかがえる。

かくて、七つの〈赤い船〉とは、未明童話の作品世界の変化と、作者未明の心象世界のさまよいを示した一つの表徴として、未明童話を鳥瞰する視点になりうるのではないかと考えるのである。

このような見通しは、小川未明の歩んだ歴史的な事実からも見てとることができそうである。いくつか、小川未明に関する歴史的な事柄に触れておくと、次のようになる。まず、I群とした「赤い船」「黒い旗物語」「黒い塔」の発表された時期は、「童話を作って五十年」（S26・2『文藝春秋』）に次のように述べられている。

大杉栄氏と知り合ったのは、大正二年、二女の鈴江が生まれたころのことです。（中略）初めはクロポトキンの崇拝者で、アナーキストだったのですが、私の考え方も、社会機構の改革によって社会をよくするよりも、まず人間の人格を尊重し、理解してゆくほうがよいという、空想的社会主義者だったわけですから、大杉君のサンジカリズムとかアナーキズムのほうに、合うものを感じました。それで大杉君の影響を受けて、クロポトキンのものを読み、前にトルストイを読んだ時と同じように、非常に温かいものを感じました。人道主義にうたれたのです。（中略）

こうして私は社会問題を深く考えるようになり、大正九年、日本社会主義同盟の発起に参加しました。

またこの間、長男を大正六年に、長女を大正七年に亡くしている。その時のエピソードが、岡上鈴江氏著の『父　小川未明』（S45・5・31　新評論）に、次のように記されている。

長男を失い、さらに四年後には長女を失って、現実の死に当面した父は、激しく胸をかきむしられ、鋭く鞭打たれたのであった。亡くなった姉が火葬場に運ばれた時、火葬場は混んでいた。悲痛にくれていた父は、そこで、先に処理されるべきはずの娘の小さな棺があとまわしにされ、あとから着いた金持ちの家の棺がさきに処理されるのを目の前で見た。

「貧乏だから、あとまわしにするのか！」

と、悲しみは怒りに変わり、激しく怒鳴ったという。

「一緒にいって下すった方たちが、『まあまあ、こんなところでどなったりするものじゃない』と、なだめてくださったが……」

社会主義、人道主義への接近と、愛する者の死や貧しさということを体験的に知った作者の呪い、怒り、悲しみに彩られた作品は、名作「赤いろうそくと人魚」をはじめ、この時期に描かれている。このよ

うな側面を、Ⅰ群の〈赤い船〉はよく示していよう。

また、Ⅰ群とⅡ群の〈赤い船〉の間に見られた断絶の頃は、大正十二年九月の関東大震災を経験、また、社会主義者として政府ににらまれていたという経験などがあろう。このことについても、岡上鈴江氏の前掲書に、大杉栄を殺害した甘粕大尉の部下が探りに来たこととともに、震災後のことが以下のように記されている。

父は何処にいくにも尾行され、そして、ついに大正十五年に治安維持法が公布されるようになると、尾行は実に根づよく、終戦近くまでつづけられたのである。

このような事情とともに、さらに複雑な事情もあったようで、そのことを木佐木勝氏は「木佐木日記（T13・12・24）」（S36・6・24『図書新聞』）で次のように指摘されている。

自分も四十を過ぎたので、社会運動の第一線に出て活動する気力もなくなったが、今後は文筆で無産階級文学のために尽くしたいと語っていた。（中略）ロマンティシズムの作家小川未明は、無産派文学の闘士に生まれかわったが、この青年のような純情な作家は、今また新たな転換期に当面しているのではないかと思った。何か今夜の未明氏のしんみりとした回顧的な話の中に、未明氏が今運動と作品の行詰まりを感じているように思われてならなかった。

そして、大正十五年、いわゆる「童話作家宣言」がなされるのである。このころ書かれたのが、〈赤い船〉の転覆する「赤い船とつばめ」である。そして、プロレタリアの弾圧、戦時体制への強化がはかられる、およそ昭和十年以降、「幼友だち」での〈赤い船〉を最後に、〈赤い船〉は作品から姿を消すのである。これらのことからも、七つの〈赤い船〉は、未明童話を鳥瞰し、さらには作家小川未明のさまよいを表徴するものではないかという感を深めているのである。

ただ、冒頭でも述べたが、小川未明は、生涯に千を越える作品を書いたと言われている。昭和十年までの初出がわかっている作品だけでも二百七十ある。未明童話の変容とその意味を言うためには、今後、さらに多くの作品に当たり、検討を重ねて行かなくてはならないと思っている。

注

（1）船木枳郎氏は『小川未明童話研究』（S29・2・15　宝文館）の中で次のように分類されている。

「幾分の時間の相違はあるけれど、だいたい、次の段階に分けられる。

小説においては、

一、初期―明治三十七年から大正六年（1904-17）までをネオ・ロマンチシズム時代。

二、中期―大正七年から大正十五年（1918-26）までを人道主義的社会主義時代

と、見做すことができる。大正十五年以後は未明は小説の筆を絶って、童話文学に専心するようになった。

童話においては、

一、初期―明治四十二年から昭和六年（1909-31）までをネオ・ロマンチシズム時代。

二、後期―昭和七年から昭和二十七年（1932-52）までをリアリズム時代。

に分けられる。」

（2）鳥越信氏は『鑑賞日本現代文学35児童文学』（S57・7・31角川書店）の中で、次のように分類されている。

「五〇年に及ぶ未明童話の足跡は、通常、三期または四期に分けられるだろう。（中略）

第一期は初期のネオ・ロマン主義の時代、第二期は大正期の人道主義の時代、第三期は昭和から戦後にかけての生活童話の時代である。四期にわけるとすれば、大正末から昭和はじめまでを、社会主義の時代とすることも可能である。」

（3）船木氏の前掲書の目次を見てみると、次のようである。

「Ⅲ　作品研究

ネオ・ロマンチシズム時代

一　憧憬と少年的エロス／二　唯心的・詩的の世界／三　孤独と霊魂の探究／四　潜在意識と夢の花／五　物と心の抗争／六　良心の追求／七　文明批評と自然に帰れ／八　浪漫的アイロニイの微笑／九　美しいヒュウマニテイの世界／一〇　感情型の子供像

リアリズム時代

一　児童観の進展／二　理智型と感情型の子供像／三　無我明朗の共感世界／四　新日本の子供像／五　美とモラルセンスの追求／六　良心と敬愛の世界／七　戦後の子供像／八　理想と憂愁」

それぞれの時期において、さまざまな観点から考察がなされているが、未明童話の内実の豊かさを示す一方、作品の列挙という観も否めない。通時的な作風の変化のダイナミズムをつかむのが難しく感じられる。

（4）続橋利雄（ママ）氏「小川未明『こじき』ものにみられる類型性」（S49・8『児童文芸』）や、高橋依子氏「小川未明童話にみる母親像」（H2・4『女子教育』）など、未明童話における素材の傾向に関する論が見られる。

（5）藤本芳則氏「小川未明『赤い船』の位置―童話集『おとぎはなし集　赤い船』の史的位相の再検討のために―」（H6・2『大阪青山短大国文』）を参考にした。

（6）山内秋生氏「明治大正の童話界」（S2・12・10『日本童話選集』第二集）

（7）「黒い塔」と「赤い船とつばめ」の二作品は、初出誌が判明していない。「赤い船とつばめ」は、「一九二六・九」（T15・9）という奥付けがある。（括弧内の元号での表記は私に記した）

（8）引用する作品の本文は、『定本小川未明童話全集』全十六巻（S51・11・10～S53・2・10　講談社）による。ただし、ルビは私に省略した。

（9）畠山兆子氏「小川未明・童話作家への出発―「少年文庫」から『赤い船』へ―」（S50・11『児童文学研究』）

（10）藤本芳則氏も前掲の論において同様の指摘をされている。

（11）続橋達雄氏が、「童話集『赤い蝋燭と人魚』の一考察」（S47・3『野州国文学』）の中で、「黒い旗物語」と「赤い蝋燭と

人魚」の比較を詳しくされている。その中で、「人魚の物語は、黒い旗の骨格をそのまま引継いでいると言えよう。」と結論づけておられる。

(12) タイトルの「黒い塔」は、作品の中には出てこない。作品の中に出てくる塔は「白い塔」である。このようなズレは、意図されたものなのかは、検討を進めて行かなくてはわからない。しかし、「黒い旗物語」での、主人公の乞食の子供（貧）、「火事」による町の滅びに対して、「黒い塔」での、主人公の姫の（富）、「つなみ」による街の滅びという対比が、「黒」という共通の色彩語を冠したタイトルから浮き上がって来るようである。また、「黒い塔」も、「赤い蝋燭と人魚」に連なる作品と言えよう。

(13) 以後、昭和に入ってからは、「黒い旗物語」のような、社会批判を中心に据える作品よりも、「赤い船とつばめ」のように、個人の生き方を提示する作品が増えてくる。また、〈赤い船〉のような、象徴的な素材を用いた作品も姿を消し、いわゆる、ネオ・ロマンチシズムからリアリズムの時代へと作風は移行する。

(14) 人間ではない娘と暮らしをともにし、「心の悪い人ではない」とされつつも打算的な心もある、人間の弱さを露呈する老夫婦、「つらいことがあってもがまん」する娘、という設定は、「赤い蝋燭と人魚」に見られる。この作品もまた、「赤い蝋燭と人魚」の一脈である作品だと言えよう。

(15) 続橋達雄氏「未明童話『雪原の少年』の一考察」（S51・10『野州国文学』）

(16) 猪熊葉子氏は、「小川未明」（S48・9・15『講座＝日本児童文学⑥日本の児童文学作家1』　明治書院）の中で、「もち前の正義感」や「儒教的教養」のせいで、「暗い現実をみながら、それに目をつぶり、虚構の世界でユートピアをつくり出そうとする」ことができなかった、「未明はあまりにも正直すぎた」と述べる。〈赤い船〉の一連のさまよいにも、作者未明の、幸福追求に対する同様の姿がうかがえる。

（かしわばら　ようこ）